

感謝を忘れず、有意義な人生を



関西大学学長 河田 悌一

平成19年丁亥（ひのと・いのしし）の年、西暦2007年3月、関西大学を卒業されるみなさん、ご卒業おめでとうございます。

みなさんは4年前の春、期待と不安を胸に、関西大学に入学。この4年間、みなさんには、入学時の初心を忘れることなく、自分の夢の実現に向かって頑張ってきた時期があれば、理想と現実のはざまに戸惑い、しばし辛い思いをした時期もあったことでしょう。

みなさんはそれぞれ関西大学の学生として、数多くのことを学び、経験してこられました。たとえば、専門ゼミでの真剣な討論、運動部や文化クラブとサークルでの活動、インターンシップ、教育実習と介護等体験、海外での語学研修、卒業論文の資料収集と執筆、そしてボランティアやアルバイト、就職活動などなど…

それらの体験の一つひとつが、みなさんの今後の長い人生の折々に、忘れ去ることができぬ貴重な体験として、走馬灯の

ように想い出されることでしょうか。おそらくみなさんの多くは充実感、達成感、満足感をもつとともに、関西大学に学んでよかったという感慨を胸に、友人、後輩、教職員に別れを告げ、この学園を去っていかれるとおもいます。

しかし、関西大学を卒業する今日をむかえることができたのは、みなさんの努力だけで可能になったわけではありません。陰に陽に支えてこられたご父母、ご家族の存在があったからこそです。その支援にたいして、感謝の気持ちをきっと忘れないでください。

ときはいま、激動と変化の時代です。と同時に、社会の格差が過酷な競争のもとで拡がり、不条理な事象が少なからず存在します。それは日本社会において、ここ数年の間、毎年、3万人を超す自殺者が出ていくという事実から、明らかであります。

そうした大変な社会に、みなさんは出発していかれるわけです。そこで必要なものは、いったい何でしょうか。

私は、三つのものが必要であろう、とおもいます。

第一には、「真理をみる目」、そして第二には、「真実を語る勇気」です。

“考えるひと”で有名な彫刻家のロダン（1840～1917）は、次のようにいっています。

——根底から、容赦なく、真理を語る者であれ。君自身が考えついたことを言い表すのに決して躊躇（ちゅうちょ）してはならない。…初めのうち君は理解されないかも知れない。しかし君の孤立はつかの間であろう。同志の人たちは間もなく君を訪ねてくるだろう。なぜなら、一人の真理は、万人の真理であるから。

そして、何が真実で正しいことかを見抜き、真実を語る勇気をもつためには、第三のものが必要です。それは、「思いやりと優しさ」であります。

思いやりある関西大学に学び、心温かい大阪の地で学生生活を送ったみなさんには、ぜひとも「優しさと思いやり」を発揮してもらいたい、とおもいます。なぜなら、厳しい競争社会のなかでは、強さも必要ですが、真に強い人間は、「思いやりと優しさ」も備えているからです。

30万人を超える関西大学の卒業生としての誇りを胸に抱き、品格ある社会人として、日本のみならず、世界を舞台に活躍されることを、心から期待しています。

HEADLINE

- 8 面 特集 写真で綴る4年間
- 7 面 特集 法学部創立100周年
- 6 面 卒業するみなさんへ
- 4・5 面 特集 一字に託す送辞と答辞
- 3 面 「関西大学月が丘住宅」が竣工

千里眼
大学とは何を学ぶところなのだろう。卒業シーズンになると毎年のように考えさせられる。学校教育の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的および応用的能力を展開させることを目的とする」と書かれている。しかし、多くの学生は、学問よりサークル活動、アルバイト、趣味や娯楽に多くの時間を費やしているのが現状である。また最近では、ダブルスクール、海外留学、ボランティア活動、学生ベンチャーなど、学生生活も多様化してきている。さらに、就職活動が早まり、三年次生の終わりの頃からは、大学に來れない状態となる。もちろん、これらの学問以外の活動はそれぞれが重要な学習であり、むしろその中で自己発見をしたり、人格形成や社会に必要な知識の修得がなされていると言える。だが、大学での学問に打ち込む時間が大切にしたいと思いう。役に立つ、立派なものではないか。それを味わうことなく卒業するのは勿体ないではないか。
(林 武文)

一字に託す送辞と答辞

法学部教授 吉田 徳夫

卒業式は、英語でコメントと表現することもあり、物事の終わり、あるいは始まりを意味する。ギリシャ神話のヤヌス神も同じ両義性を以て説明される。過去に向けた顔、未来へ向いた顔の2つを人間は持つのである。過去と未来の接点の上に現在があるのである。卒業も学業の修了ではなく、始まりを意味する。今後も学ぶべきことは多事に及ぶという訳である。未来は、過去の連続と未来への抱負により決まる。たゆまぬ努力の出発点は今、ここに、あなたにある。

卒

文学部教授 内田 慶市

孔子は「人が一生実行すべきは何か」という問いに対して、「恕」であるとし、「己の欲せざるところ人に施すことなかれ」と述べている。今この世界を支配するのは、「グローバル化」という名の下の、世界の「アメリカナイゼーション」＝「競争原理」至上主義＝「強いものが正義」の原理である。「いじめ」も「ワーキングプア」も、その根っこはここにある。人類に残された唯一の希望は、「恕」の復権であり、相手との「違い」を認めることだと思う。人は「みんなちがって、みんないい」。そこから、私たちはもう一度歩み始めるべきだろう。

恕

経済学部助教 中澤 信彦

私のゼミでは毎年春の恒例行事として坐禅会に参加している。「坐」の字は土の上に2人の人間が対座している状態を表すが、実は2人は同一人物。ゆっくり静かに呼吸を整えるうちに雑念が消え、本当の自分が立ち現れてくる。息つく暇もない生活を送っているのは本当の自分は永遠に失われたまま。成熟時代の経済においては絶え間ない変化への迅速な対応が成功を左右するとされるが、だからこそ逆にこの字が放つメッセージは重い。

坐

商学部教授 明神 信夫

私の故郷富山県の五箇山には合掌造り集落がある。岐阜県白川郷とともに世界文化遺産に指定されている。ここでは合掌造りの家の茅葺き屋根を葺き替えるのに200人を超える人たちが力を貸し合う。これを地元の人は「結(ゆい)」という。1人ではできないことも、多くの人たちの力を借りることができれば成し遂げられるもの。人の輪を作り、知恵・力を貸そう、知恵・力を借りよう、1人で悩まずに！ 関大卒業生の輪も結の組織である。

結

社会学部教授 森田 雅也

饑(はなむけ)にはあまり使われない一字かも知れない。しかし、これから社会に出るみなさんには、人の痛みがわかる人間になってもらいたいと願ひ、この一字を贈ることとする。成果主義だ、格差社会だと言われる中で、ともしれば自分だけが良ければいいと考える人が増えているようだ。しかし、ともに手を携え、助け合うことなしに社会は成り立たない。人の痛みを想像し、配慮する心の広さと余裕を持ってこれからの人生を歩んでほしい。

痛

総合情報学部教授 菅 知之

信用の信、信頼の信である。人(にんべん)に言を合わせた合意文字で、元々は一度言明したことを押し通す行為を意味する。社会人として一番大事なのは、信用され、信頼されることだ。会社で思い通りにさせてもらえないと嘆く若者がいたが裁量の範囲は信頼に比例するものだ。しかし信頼は待っていて与えられるものではなく、自ら実績を地道に積み上げて勝ち取るものだ。キャリアとは積み上げた実績だが、勝ち取った信頼でもあるのだ。

信

工学部教授 上里 新一

当初は、「忍」という文字を選択することを考えた。しかし、希望に満ちた卒業生へのはなむけの言葉としてはやや不適切と思い、この一字を選んだ。「志」は何かをこころざす、めざすという意味で用いられる。志気、志学、志義、などはその例であろう。しかし、元来、「志」は誌・識の意に用い、心にある厚意、信念、感動などの意を表すようである。卒業生諸君が、社会で、何かを志向する「こころざし」と共に、人としての「こころざし」を持ち続けてもらいたいものだ。

志

外国語教育研究機構教授 山本 英一

学問を修め新しい世界へと巣立つ姿を、春の訪れとともに、大地を突き破り天に向かって真っ直ぐ伸び出す植物の芽に喩えたい。ただし、めざすは天空ではなく、心豊かな人生。金銭や名誉で測ることのできない、この花を咲かせるには、目先の華やかさや一時の快楽に惑わされてはならない。人としての信義に背いてはならない。志という堅固な根を大地に下ろし、深い教養と多くの友を頼りに、只ひたむきに生きるのである。

萌

文学部教授 松浦 章

「龍」は中国人が考え出した想像上の動物であるが、王者を象徴する文字として使われてきた。これから社会の各方面において活躍する大学院生・学部学生のみなさんに期待することを「龍」字を借りて表現したい。就任当初は思い通りに行かないことも多いであろうが「臥龍」として、いつでも実力を発揮できる人材であり、機会を得れば「昇龍」として活躍し、各方面において「龍坐」に登り詰められるよう努力されることを祈念する次第である。

龍

大学院法務研究科教授 栗原 宏武

公平な、社会の尺度。学んで、身につけ、そして生かそう。それを生業に身を立てる。軽んずれば、身を滅ぼす。自分も家族も。会社も国も。だから、法令遵守。養って。説いて。黙々と。子供にも。弱きを助け、悪を暴き、正義を守る法。秩序を守り、社会を守る法。さあ、いよいよ実践だ。勇気を持って。一生学ぶ。努力して。健康で。人の心の痛みの分かる法律家として。期待される法律家として。諸君の健闘を祈る。

法

法学部卒業生 神崎 崇

闘う相手とは、世の中にあふれる比較対象可能な相対的存在ではなく己である。譲れない目標があるならば、極限で決して逃げることなく己と向き合うことで不安すらも楽しみとなる。失敗を繰り返し原点に帰ることもあった。また、練り出した答えをあえてほかすことが必要な場合もあった。関わったすべての人に感謝し、自分の信じためざすべきものに徹底的にこだわる。そして、軸がぶれることなく、その実現に向け努力する人間として生きてゆく。

己

文学部卒業生 一ノ宮 渉

私は、指導者のいない素人が2年でディベート日本一になるという「無謀」に挑んだ。全身全霊で叩き潰す。鮮やかに倒してのける。余裕綽々で打ち負かす。そんなふうにもやれるものなら、私もそうしたかった。やれるものなら。相手は古豪・天才たち。いわゆるディベート60年の集大成。敵わないのか。敵わなくとも、自己を「護」りきる！心は折れない。そう誓った全国大会決勝。やった！勝ったぞ！「試合」より「無謀」への勝利の意味があった。

護

経済学部卒業生 岩崎 優子

胸を高鳴らせて関大の門をくぐってからもう4年が過ぎたのかと思うと本当に速い4年間だった。昨日のことのように思い出せる入学式、資格取得に燃えたあの日々、苦戦した単位習得に汗水たらして歩き回った就職活動、そして思い出深い寮生活。この大学生活では多くのことに挑んだ。そして多くの先輩や友の支えがあり、道は開かれてきた。これから挑み続ける社会への道は一筋縄ではいかないことも多いと思う。だが、信じよう。挑み続ければいつか道は開かれる。みんな卒業・卒業おめでとう。

開

商学部卒業生 宇杉 阿津子

私の大学生活はまさに絶妙のハーモニーを奏でていた。ゼミでの研究、オープンキャンパススタッフとしての活動、インターンシップ、旅行…そして大学で出会った人たち。このすべてが私の生活にさまざまな変化を与え、素晴らしい大学生活を作り上げてくれた。何か1つに打ち込むのではなく、心の赴くままたくさんものに挑んだ。それを可能にし、私を支え、ハーモニーを奏でてくれた多くの人に感謝したい。

奏

社会学部卒業生 奥野 名絵

やりたいたいことをやりたいたくだけ、行きたい所へ行きたいだけ。想像していた以上に夢のような大学生活だった。教授陣の手によって柔軟な視点を持てるようになったこと。事務職員の人たちのおかげで、新たな一歩を踏み出す機会に恵まれたこと。志の高い仲間たちに囲まれ、刺激に満ちた生活を送れたこと。この4年間で出会った人びとや学んだことは私の財産であり、何物にもかえがたい。この学び舎で大学生活を送れたことを感謝するとともに、社会に出ても躍進し続けることをここに誓う。

躍

総合情報学部卒業生 平田 晋也

気付けば、大学に入ってから4年という月日が過ぎ去ってしまった。そのなんと速かったことだろう。大学に入る前の自分はどんな人間だったのだろうか。自分が大学で得たものはどんなものだったのか。そんな思いに駆られてふと後ろを振り返れば、重ねた過ちは経験となって己の器を広げ、頭を過った想いは思い出として心に根付いている。4年間の大学生活は過去へと姿を変え、自分の背中にそっと寄り添っていた。

過

工学部卒業生 川瀬 智裕

案ではなかった。むしろこの4年間辛い事が多かったのではないだろうか。しかし、今の私はこれら乗り越えられたからこそここに在る。私を成長させてくれた経験のすべてにおいて1つの共通点がある。「楽しかった。ものすごく楽しかった」仲間たちと笑いながら、時には怒鳴りながら議論した事が頭をよぎる。これら多くの苦難に見舞われる事は覚悟しているが、それらをも楽しいと感じられるように無我夢中で乗り越えていきたい。そして私は成長を続ける。楽しい思い出とともに。

楽

大学院外国語教育学研究科修了生 正頭 英和

花言葉のひとつに「よい教育」という意味があるそう。ずっと、仲間とともに「よい教育」について、悩み、考え、語り合ってきた。春は、そんな仲間との別れの季節。それぞれの道を、期待と不安を両腕一杯に抱えながら歩き始める。しかし道は違えど、めざす先は同じ、「よい教育」だ。別れの季節、そして出会いの季節に咲く花。その花言葉に運命的なものを感じる。どんな困難な道にいても、一人ではないことを思い出させてくれる花である。

桜

大学院工学研究科修了生 温井 崇友

大学授業での学習支援システムの運用、後輩の指導、関大一高非常勤講師。大学院へ進み、多くの役目を任せられ、同時に責任が生まれた。社会に出ればさらに大きな責任が待っているだろう。しかし卒業式の今日、安心して私たちを送り出して欲しい。大丈夫。先生方や仲間、そして家族のおかげでここまで成長できた。どんな困難でも乗り越えられる自信がある。輩の強さと誇りを胸に、日本の未来を、社会を、関西大学を任せてもらえる、そんな存在になろうと心に誓う。

任

大学院法務研究科修了生 木山 生都美

法科大学院での貴重な体験を糧にしたい。先生から法律を学ぶことが本当に楽しかった。努力する喜びを知った。尊敬すべき実務家の先生に出会い、視野・考え方が広がりあるべき法曹の姿について考えたりもした。3年間同じ志をもった友人と肩を並べ、お互い刺激しあい、自分も頑張ることができた。法曹になることは平坦とは言い難いが、私が自分で考えて決めたのだから、この3年間の貴重な体験を糧に、己の信念を貫き頑張ろうと思う。

糧

法学部創立120周年 創立の精神を現代社会で実践する

本学法学部は、昨秋、創立120周年を迎えた。法学部では、これを記念してシンポジウムおよびコロキウムを開催し、近々『関西大学法学論集』記念号も上梓される。120年の歴史と伝統を有する法学部は、いま、創立の精神を現代社会のなかで実践すべく、教育・研究の更なる充実に取り組んでいる。

願宗寺



関西法律学校の創立とその精神

■関西法律学校

関西大学法学部の起源は、1886(明治19)年11月4日に大阪西区京町堀に開校した「関西法律学校」という夜学校にある。この学校こそが関西大学の前身であるから、法学部は、昨年の秋、大学とともに、創立120周年を迎えたことになる。

願宗寺という寺院を借りて開校した関西法律学校では、かつて司法省法学校でボアソナードの薫陶を受けた井上操や小倉久など、当時在阪の現職判検事たちが、仕事を終えてから学生たちに法律を教えた。ボアソナードは、当時の日本にあっては何よりも法学の普及、権利観念の鼓吹が急務であると考えていたが、門下の彼らもまた、近代国家を支える新しい市民が育っていくためには法律に関する知識の普及が不可欠であると考え、夜間の教壇に立った。1880年代前半、東京では、東京法学校(後の法政大学)などの「五大法律学校」が次々に開校していたが、関西には本格的な法律学校がまだ存在していなかったのである。

■関西法律学校と児島惟謙 関西法律学校の創立が部下の司法官たちによって企てられたとき、彼らの上司であった大阪控訴院長・児島惟謙は、自らもこの学校の「名誉教員」となり、開校の実現に尽力した。児島は、深い関心と愛情をもってこの学校の揺籃期を見守った。

その児島が大阪控訴院長から大審院長に転任した直後に突発した事件が、日本近代史上に著名な「大津事件」である。

明治憲法の制定からわずか2年後の1891(明治24)年、来日中のロシア皇太子が、滋賀県大津で、護衛にあたった日本人巡査によって斬りつけられたこの事件について、政府は、当時の刑法が規定する日本の皇室に対する罪(大逆罪)を類推適用して、犯人を死刑に処すという方針をとったが、裁判を行った大審院は、大逆罪ではなく謀殺未遂罪を適用し、犯人に無期懲戒の判決を言い渡した。

この事件で、大審院(司法)が、政府(行政)の圧迫に抗して、刑法の類推適用を排することができたのは、大審院長であった児島惟謙が政府の干渉にねばり強く抵抗したからであるといわれ、児島は「司法権の独立」を擁護した立役者、「護法の神」と評価されてきた。

ただ、児島は、大審院の担当裁判官らに対して、政府の圧力に屈することのないよう強い説得を行ってのもいるので、司法権の独立が「裁判官の独立」を当然に含むとするなら、児島の説得行為は、司法部内においては行き過ぎた干渉であったかもしれない。また、児島にあっては立憲君主国たる日本の威信を維持することのみが関心事であり、国家権力との関係において加害者の人権をどのように保障するかという発想が欠落していたともいえるであろう。しかし、児島の思想と行動を通して、生まれたばかりの明治の立憲主義、罪刑法定主義は、ともかくも最初の試練を乗り越えることができたのである。

■正義を権力より護れ 関西法律学校の創立に「名誉教員」として関与した児島惟謙が大津事件に際して示した思想と行動は、当然ながら、この学校の後身である関西大学に大きな感化を与えた。

1947年(昭和22年)12月、翌年度からの新制大学への転換準備が進められるなか、当時の学長・岩崎卯一(法学部教授)は、「関大の始祖」児島惟謙の大津事件における行動から学ぶべきは何かということをも「正義を権力より護れ」という標語で端的に表現した。この標語は今日では「正義を権力より護れ」と表記されて、関西大学建学の精神を示すことばといわれている。

創立120周年記念事業

創立120周年を迎えるにあたり、関西大学法学部は、市民のための法学の普及という関西法律学校創立の精神を弛まず継承しつつ、現代社会における喫緊の課題にも精力的に取り組んでいることを学内外に示す記念事業を企画、実施した。

■記念シンポジウム 法学部創立120周年記念シンポジウム「司法制度改革と法曹の新たな役割像」は、法科大学院との共催で、昨年11月18日に、第2学舎4号館BIGホール100を会場に開催された。

まず、滝井繁男氏(元最高裁判所判事)による基調講演「裁判所から見た司法制度改革」が行われ、今回の司法制度改革の特徴が、裁判所とのかかわりを中心に論じられた。続いて、「動き出した<法テラス>—その課題を探る—」をテーマに、大場亮太郎氏(日本司法支援センター事務局長)、佐伯照道氏(弁護士、日本司法支援センター大阪事務所)、小寺一矢氏(弁護士、大阪弁護士会会長)、佐柄木俊郎氏(国際基督教大学客員教授、元朝日新聞論説主幹)、久保井一匡氏(弁護士、元日弁連会長)によるパネルディスカッションが行われ、10月2日の業務開始から約1か月が経過した「日本司法支援センター」(<法テラス>はその愛称)について、その設立の経緯や業務の内容、スタッフ弁護士の役割、さらには当面する課題などが詳しく議論された。

今般の司法制度改革は、法的な紛争解決を基本とする<法治社会>の実現、いわば「第二の近代化」を見据えて行われたものであり、その背景には、関西法律学校が創立された近代国家形成期との、一定の共通性が見いだせる。とりわけ、一連の司法制度改革の総仕上げともいべき<法テラス>は、すべての国民が法的な紛争解決の制度や手続きを容易に利用できるような、必要な情報やサービスを提供する機関であり、関西法律学校の創立の精神に重なる意義をそこに認めることができる。

■記念コロキウム 法学部創立120周年記念コロキウム「21世紀の東アジアと日本」は、法学研究所との共催で、昨年12月2日に、尚文館マルチメディアA V 大教室を会場に開催された。文正仁氏(延世大学教授)による「移行期の東北アジア—新旧の緊張と将来の地域秩序—」、歩平氏(中国社会科学院近代歴史研究所長)による「東アジアにおける共同の歴史像の創造」、我部政明氏(琉球大学教授)による「沖縄からみた東アジア」に関する報告が行われたのち、豊下植彦氏(関西学院大学教授)と孝忠延夫(法学部教授、法学研究所長)が討論者となり、東アジアと日本という枠組みのなかで信頼醸成はいかにして可能かという問題について、活発な討論が行われた。

緊張を増しつつある現下の東アジア情勢のなかで、歴史を記憶に刻みつつ、相互の信頼関係を創出していくことはどのように可能となるか。記念コロキウムの開催を通じて、法学部は、東アジアの政治的安定という焦眉の問題にも真摯な眼差しを向けた。

■『関西大学法学論集』記念号 『関西大学法学論集』は、1951(昭和26)年の創刊以来、法学部教員によって執筆された学術論文を中心に、法学・政治学に関する研究成果を世に問う論文集として、広く江湖に受け入れられてきた。創刊より半世紀を超えるその歩みは、戦後の新制関西大学法学部の歴史と軌を一にしている。

本年3月に刊行が予定されている『関西大学法学論集』法学部創立120周年記念号には12編の学術論文が掲載されるが、ここでは、執筆者たる個々の教員が、各々の専門領域における重要課題にどのように取り組んでいるかを具体的に明らかにすることを通じて、それぞれが直接に関西大学法学部120年の学問的伝統に連なっていることを示しているといえよう。

法学部 これからの



司法制度改革の一環として、法科大学院という法曹養成に特化した専門職大学院が2004年度から設置されることになり、本学でも法科大学院が開校した。法科大学院の設置に連動して、司法試験制度も、2006年度から5年間の経過措置を経て、法科大学院課程の修了者または司法試験予備試験の合格者のみが受験資格をもつ新司法試験に完全移行する。

このような法曹養成システムの大幅な変革をも見越して、法学部では、すでに2002年度から、改革されたカリキュラムを実施している。この現行カリキュラムでは、法律学科に「公務」、「ビジネス」、「法曹」、「国際」の4コースを、政治学科に「総合」、「公共政策」の2コースを設置し、学生の多様な関心に対応するとともに、将来の進路にも連なるように課程設計がなされている。

現行カリキュラムは、2006年3月に、この課程を修了した最初の卒業生を社会に送り出したが、法学部では、現行カリキュラムの効果について検証するとともに、目下、新たな課程編成を進めつつある。

新カリキュラムでは、現代の法治社会を生きる専門の力量をしっかりと身につけて自己実現していける学生を育てることを主眼に、より効果的な専門導入教育の実施、法学部専門教育の核としての基幹科目の再構成、各種ゼミナールの充実、多様化する学生の学問的関心や進路志向に柔軟に対応しうる履修システムの構築、以上との関連における開講科目の整理・再編、などが鋭意検討されている。

また、本年4月、総合情報学部以来の新しい学部である政策創造学部が本学に誕生するが、政策系学部の開設にともなって、法学部における政治学系カリキュラムの再編についても検討が進められている。法学部における政治学教育については、創立の精神の実践に不可欠なその重要性を十分に認識したうえで、学科構成をも含めた新たな課程設計が必要とされているといえよう。法学部は、創立120年の歴史と伝統を踏まえて、現代社会のなかで創立の精神を実践すべく、志も新たに更なる歩みを進めようとしている。

(法学部長 市原 靖久)

関大通信 第342号

平成19年(2007年)3月20日
大阪府吹田市山手町3-3-35
http://www.kansai-u.ac.jp/
次号は5月17日発行の予定です

写真で綴る4年間

2003~2006

2003 (平成15年度)

- 4月
 - ▶ 昼夜開講制を導入
- 6月
 - ▶ 剣道部西村健さんが全日本学生剣道選手権大会で優勝
- 7月
 - ▶ 関西大学東京センターがオープン
- 10月
 - ▶ 第38代学長に河田悌一文学部教授が就任
 - ▶ 法科大学院棟「以文館」が竣工
- 11月
 - ▶ 法科大学院の設置が認可
- 1月
 - ▶ 水上競技部山田沙知子さんが競泳女子自由形800メートルで短水路世界新(当時)

2004 (平成16年度)

- 4月
 - ▶ 法科大学院を開設
 - ▶ 関西大学中之島センターがオープン
- 8月
 - ▶ 水上競技部山田沙知子さん、女子サッカー下小鶴綾さんがアテネオリンピック出場
- 9月
 - ▶ 第2学舎4号館が竣工
- 10月
 - ▶ 理事長に森本靖一郎氏が就任
 - ▶ スーパーSINETの運用が開始
 - ▶ 経済学部創設100周年記念国際シンポジウム・記念式典・講演会を開催
- 11月
 - ▶ 高槻キャンパスに馬術部の馬場・厩舎が完成
- 1月
 - ▶ アイススケート部高橋大輔さんがユニバーシアード冬季大会フィギュアスケートで優勝

2005(平成17年度)

- 4月
 - ▶ 社会連携推進本部を設置
 - ▶ ボランティアセンターがオープン
- 7月
 - ▶ サッカー部が総理大臣杯全日本大学サッカートーナメントで優勝
- 9月
 - ▶ 工学部第6実験棟が竣工
- 10月
 - ▶ 陸上競技部平野司さんが日本トリアスロン選手権で優勝
- 11月
 - ▶ キャリアセンターに卒業生就業支援室を設置
 - ▶ 射撃部松村久基さんが世界学生選手権で優勝
- 12月
 - ▶ 野球部岩田稔さんが阪神タイガースに入団決定
- 会計専門職大学院の設置が認可
- 1月
 - ▶ 女子寮「関西大学ドミトリー月が丘」が竣工
 - ▶ アイススケート部織田信成さんが四大陸選手権で優勝
- 2月
 - ▶ 総合学生会館 メディアパーク 凜風館が竣工
 - ▶ アイススケート部高橋大輔さんがトリノオリンピックフィギュアスケート男子で8位入賞

2006 (平成18年度)

- 4月
 - ▶ 会計専門職大学院を開設
- 5月
 - ▶ 商学部創設100周年記念式典を挙げる
- 6月
 - ▶ 関関戦で総合優勝
 - ▶ サッカー部が関西選手権で優勝
- 7月
 - ▶ 関西大学アイスアリーナが竣工
- 9月
 - ▶ カレッジリンク型シニア住宅創設記念シンポジウムを開催
 - ▶ 教務センターが開設
 - ▶ 水上競技部浦部紀衣さんが日本学生選手権水泳競技大会で優勝
- 10月
 - ▶ 簡文館に年史資料展示室が完成
 - ▶ 第39代学長に河田悌一文学部教授が再任
- 11月
 - ▶ 悠久の庭が完成
 - ▶ 創立120周年記念式典を挙げる
- 12月
 - ▶ アイススケート部、高橋大輔さん・織田信成さんがNHK杯、GPファイナル、ユニバーシアード冬季競技大会で表彰台独占



しい。(下家 浩二)

本号では、卒業にならな
んで、「字に託す送辞と
答辞」と題した特集を企
画・掲載した。本特集
は、昨年も企画・掲載さ
れ、好評であったと聞い
ている。本年も、送辞と
して送る側の教員にも、
答辞として受け取る側
の学生にも、本号で過ご
した時間を振り返りなが
ら、それぞれに思いのあ
る一字を選んでいただ
い。漢字を用いた言葉
遊びのよう、非常に
おもしろい企画である。
本音を言えば、一字では
表せないのが現実かもし
れない。それだけに、一
字に込められた意味は、非
常に深遠なものである。
これらの「一字」が、
かつて指導教員と学生と
の間で共有された思いと
して、そして大学生活が
人生における単なる通過
点だけではない証として
、両者の心に残って欲
しい。



▶ 編集後記 ◀